

雨が降ってきた。

行き交う人々は持ち歩いてきた傘を広げ、平然と歩いていく。世間一般の人というのはこんなにも用意周到なのか。……いや、違う。今の私には、天気予報を見る余裕さえもなかっただけだ。

私は雨に濡れ、俯きながら歩いた。雨は強さを増していく。スーツの背中はずっとりと濡れ、パンプスの中に溜まった水がかばかばと嘲笑うような音を立てる。

まったく、悪いことというものは重なるものだ。どこで道を踏み外したのかもわからないまま、ずるずるとどん底まで落ちていく。するとどうだ。どん底だと思っていたところが、実はまだまだ浅瀬だったと知ってしまった。そしてまたずるずる、ずるずる。その繰り返しだ。

生きるのに疲れた。今の私を形容するのにこれほど相応しい言葉もなかった。

そもそも生きているのかどうかさえ怪しい。駅のトイレで鏡を見ても、死人みたいに青白い顔の女が映るだけ。楽しみも喜びもなく、毎日がただ過ぎていく。そのくせ、悲しみだとかそういう感情だけはひっきりなしに頭の中をかき回していくのだ。

ああもう、死んでしまったほうが楽かもしれない。ほら、いつの間にか大きな橋に差し掛かっている。ひょいっと手すりを乗り越えれば、下の河まで一直線。茶色く濁った流れは、私のすべてを跡形もなく洗い流してくれるだろう。

私は手すりに寄りかかって、増水した河を見下ろした。飛び込んでしまおうか。きつとそのほうが幸せだ。何も感じず、何も考えず、薄暗い闇の中でずっと揺蕩っていられるのなら。

私は身を乗り出し……手すりを、離れた。へその下がきゅっと引っ張られるような感覚がして、真っ逆さまに落ちていく。下へ、下へ。そして。

ごん。

頭を何か硬いものに思いつきぶつけて、私はひっくり返った。

「~~~~~っ！」

こんなに頭を強打したのは人生で初めてだ。星の混じった砂嵐が目の前で荒れ狂う。私はしばらくその場にうずくまっていた。

やがて頭をさすりながら顔を上げると、目の前には滑らかな石壁があった。

「えっ？」

慌てて周囲を見渡す。

そこは、知らない街の知らない大通りだった。さっきまで歩いていた街の面影はどこにもなく、通行人の姿も見当たらない。ごつごつした石畳が敷き詰められ、両側には煉瓦造りの建物がひしめいている。通りはどこまでもまっすぐ続いていて、終わりが見えない。一定間隔で並ぶ街灯のゆらゆらとした光が、私の影を蠢かせていた。

雨は止んでいる。いや、そもそも降っていないようだ。

乾いた石畳に手をつけて、私は立ち上がった。ここは、どこだ。

ぶるり、と体に震えが走る。飛び降りたときの感覚を思い出して、私は自分を抱きかかえるようにしてさすった。そうだ。私は飛び降りた。ということは、つまり、ここは、死後の……。

「おや、これは珍しい」

後ろから急に声をかけられて、私はびくっと身をすくませた。

恐る恐る振り向くと、そこには。

「……タキシード？」

蝶ネクタイと白いシャツ、その上からぴしっと糊の効いた黒いジャケット。袖から覗く白い手袋。皺ひとつない黒いスラックスと丁寧に磨かれた革靴。それは、どこからどう見てもタキシードだった。……着用者がどこにもいないことを除けば。

「タキシードというのは服装を指す言葉であるからして、私を見て『タキシード』と呼ぶのは貴女を指して『スーツ』と呼ぶようなものです。つまりはいささか失礼にあたる。お分かりか」

空っぽのタキシードは手を振り回し、一息でまくしたてた。

「はあ」

どこから発声しているんだろう。

「私はウェイター。目の前にあるしがない店の、しがない給仕でございます」

目の前にある店。私がさっき頭をぶつけた建物だ。よく見るとそれは壁ではなく、重厚な造りの扉だった。上に掲げられた看板には、『Ristorante Fantasia』と流麗な飾り文字で記されている。

「リストランテ・ファンタジア……」

その扉が、まるで私を迎え入れるように開いた。

「おや、これは失礼。当店のお客様でしたか」

タキシードが飛び上がり、慌てたように両手を振り回す。

こんな店に来たつもりはない。だけどなんだか誘われているような気がして、いつしか私はふらふらと扉に近づいていた。

「どうぞどうぞ、お入りくださいませ」

タキシードが私の手を引く。

一歩足を踏み入れると、そこは暖かく乾いていた。だけど相変わらず人の気配はなくて、がらんとした店内でランプの光だけがゆらゆらと動いている。

「ご予約は？ ありませんね。結構結構、大歓迎です。なんせ当店の常連客は、ハツカネズミと閑古鳥」

歌うように眩きながら、タキシードは私を小さなテーブルに案内した。

さっと椅子を引かれ「どうぞ」と促されるままに腰掛け、テーブルの上に置いてあるメニューを手取る。それはどうやらコース料理のメニューだった。

「あの、他のメニューは……」

「当店はコース料理のみとなっております」

タキシードは胸を張った。



Menu



Aperitivo [食前酒]

Back from the Future 7

Antipasto [前菜]

グリムの野に咲く百合の花——いばら姫 15

Primo Piatto [第一の皿]

言葉の海に住まう蟹 31

Secondo Piatto [第二の皿]

アフターダーク 47

Contorno [付け合わせ]

はるか田舎の酒場にて 73

Caffè [珈琲]



あの空の暗闇と、この指先の灯 79

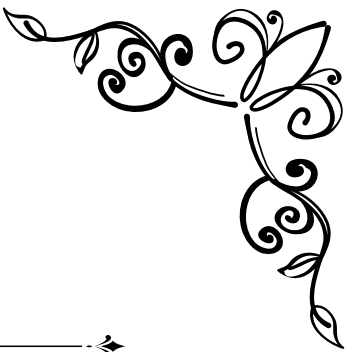
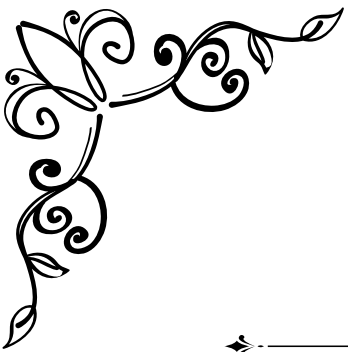
Dolce [甘味]

甘さが甘って甘らない 93

Digestivo [食後酒]

キング子 105







[第一の皿]

Primo Piatto

言葉の海に住まう蟹

保井海佑



言葉の世界は広大である。名詞、動詞、形容詞、副詞……さまざまな種類へと独自の進化を遂げた生き物たちが、この世界には生息しているのだ。

この世界では、日々、そんな個性豊かな生き物たちによる悲喜交々のドラマが繰り広げられていた――。



「美味しい料理をお腹いっぱい食べられると思うと、いまからお腹が鳴るよ。ヤ国の食べ物ほれもこれも旨いと評判だからね」

そう言つて巨体を揺らすのは、フクヨカニというふくよかな蟹である。フクヨカニはたいへん食いしん坊な蟹であり、毎日たらふく餌を食べている。そんな生活をしているフクヨカニが、ふくよかにならないはずがない。

「うん。さすがに、僕も今回の旅は楽しみだよ」
「さすがに」が口癖のサスガニが、フクヨカニに同意した。

「確かに」

と、最後に相槌を打ったのは、「確かに」が口癖のタシカニである。タシカニは何にでも同意してくれる聞き上手である。

タシカニ、サスガニ、フクヨカニは互いに気心の知れた

蟹友達である。しばしば一緒に観光旅行に出掛ける仲であり、これまでも三人でさまざまな観光名所に訪れてきた。

今回、彼らが訪れることにしたのは、ヤ国という有名な蟹の国である。「雅な古都」としてもつばら観光名所として評判のヤ国に、いま彼らは向かっているところなのだ。

ヤ国には、これまでつねづね訪れたいと思つてきた彼らだったが、少々遠方にあるのでこれまで行く機会を作れなかったのである。

蟹の移動手段はもつぱら足である。どこへ行くにも、横歩きでひたすら歩くしかない。運動嫌いなフクヨカニが、いままでヤ国に行きたがらなかったのも無理はなかった。

今回、サスガニとタシカニの強い説得によつて、ついにフクヨカニもヤ国までいっちょ歩いてみるかという気になり、ようやく念願のヤ国旅行が実現したのである。

蟹股かにまたで歩き続けること数日、タシカニ、サスガニ、フクヨカニの一行は歩き疲れてへとへとになっていた。

「さすがに、疲れたね」

と、サスガニが言うのと、

「確かに」

と、タシカニが相槌を打ってくれた。タシカニはいつでもどこでも同意してくれる聞き上手である。

「地図によると」フクヨカニが大きなお腹をゆすりながら

言った。「もうとつくにヤ国に着いていておかしくないはずだよ。それなのに、どこまで歩いても町らしきものに辿り着かない。どうも変だ」

「確かに」タシカニがまたも相槌を打った。タシカニはのべつ幕なしに同意してくれる聞き上手である。

タシカニ、サスガニ、フクヨカニが戸惑ってその場に立ちすくんでいると、そこに一匹の蟹が通りがかった。

「君たち、そんなところに突っ立って何をしているのだ」と、その蟹は問うてきた。

「実はヤ国へ行く途中なんだよ。でも、いつまで歩いてもヤ国に辿り着かなくて、どうしたものかと立ち止まっていたところさ」

「ああ、なんてことだ」その蟹は二つの鋏を上下に動かす仕草をし、大袈裟に嘆息の表情を浮かべた。「ヤ国は滅んでしまったのだよ。ヤ国の滅亡のことを知らないとは、君たちはよほど遠いところから来たのだろうね」

「遠いところから来たのは、その通りだよ」サスガニは頷いた。「でも、ヤ国が滅びたとは、さすがに信じがたいな。ついこのあいだ、ヤ国の領土拡張の噂を聞いたばかりだよ。繁栄はあっても滅亡はありえないはずだ」

「確かに」タシカニが相槌を打った。タシカニは四六時中、明けても暮れても、隙あらば相槌を打ってくれる聞き上手である。

「それが、違ふのだよ」その蟹は今度は右の鋏を左右に振

り、否定の仕草をした。「なるほど、ヤ国は蟹社会のなかでは一番繁栄していた国ではあった。それは本当だ。しかし、驚くなかれ、ヤ国は一夜にして滅びてしまったのだよ」

「ヤ国の名産品を食べるの、楽しみにしていたのに」フクヨカニは悲しそうに言った。

「確かに」

「だけど、ヤ国ほどの大国が、一夜にして滅んでしまったなんて話、さすがに信じられないよ」

「確かに」

「そんなに信じられないというのであれば、話して聞かせようではないか。ヤ国がいかにして滅んだのか、その一部始終を」

「そうしてくれると助かる」

「確かに」

「では、ヤ国の滅亡について、知っていることをすべて話そう」こほん、と咳払いをして、その蟹は語り始めた。「私はヤ国で生まれ、ヤ国で育った蟹だ。名前はマコトシヤカニ。どうだね、名前にヤカニとあるだろう。つまり私はヤ族の血を引く者。そんな私が嘘をついてまで『ヤ国が滅亡した』という情報を流すわけがないだろう。だから、私これから話すことは、すべて本当に起こったことなのだ」マコトシヤカニは、まことしやかにそう前置きし、ヤ国が滅亡するに至った経緯を語り出した。



ヤブレカブレニ王国——通称ヤ国はもともと、ヤ族のみからなる単一民族国家であった。通説では、ヤ族の伝説の王・タカヤカニ一世が蟹曆八二〇年、ヤブレカブレニの地に建国したのが始まりであるとされている（これは、「八二〇かぶれに王国建国」という語呂合わせで覚えると覚えやすい。この機会にぜひ暗記しておこう）。

現在、ヤ国の王として君臨するのはミヤビヤカニという雅やかな蟹である。ミヤビヤカニは、後のキラビヤカニとともにヤ国を治めていた。「雅やかに、かつきらびやかに」をスローガンに掲げるミヤビヤカニの政治は、蟹たちの支持を得て、国は安定し、経済は発展し、ヤ国は一大王国として成長していった。

ミヤビヤカニとキラビヤカニのあいだには二匹の子供がいた。「健やかに育つように」との想いを込めて名づけられたスコヤカニと、「伸びやかに育つように」との願いを込めて名づけられたノビヤカニである。ミヤビヤカニが引退したときには、当然スコヤカニかノビヤカニが王様になるのだらうと、誰もが思っていた。スコヤカニもノビヤカニも、名前に込めた通り、健やかに、そして伸びやかに成長していたから、どちらが王様になっても、よい政治をしてくれるであらうと思われた。それゆえ、ヤ国のいつそ

の繁栄は約束されているかに見えた。

ところが、平和そのもののヤ国を揺るがす事件が起きた。そのきっかけを作ったのが、イ族が率いるイ国である。

イ国——正式名称イチフジニタカ・サンニナスビ帝国は、国民の数こそ少ないものの、戦争をさせるとめっぽう強かった。というのも、まずイ族には、支配欲の強いシハイカニがいる。シハイカニはつねに他国を支配下に置くことばかりを考えている戦争好きな蟹である。さらには、コワイカニという、名前からして恐そうな蟹もいる。コワイカニは見た目も恐そうであり、喧嘩が強い。だがコワイカニの本当に恐いところは、その頭脳にあった。コワイカニは、不思議な現象に出会うとすぐ「此は如何に」と言って頭をひねる癖のおかげで、めきめきと思考力がつき、頭の切れる参謀としてイ国で重宝されていたのである。シハイカニとコワイカニの国策により、イ国は、優秀な蟹であれば、地方の蟹であらうと外国産の蟹であらうと出身地不明の蟹であらうと関係なく徴用するようになって、ますます国力を高めた。

戦争の準備が整ったイ国がまず最初に戦いを挑んだのは、ラリリルレレ王国——通称ラ国であった。ラ国は、古くからラギオニヘンカクカツイオ平原を支配してきた伝統ある国である。アリ・ヨリ・ハベリ・イマソガリなどの特産品によって栄えてきたこの国は、イ国が手始めに併合するのによい国だと言えた。ラ国は中規模の国であり、

腕試しには手頃な大ききだったのである。また、ラ族は誰も彼もが喧嘩を好まないおとなしい性格であったので、この点もイ国にとっては非常に好都合であった。

ラ国の王様はオテヤワラカニという蟹で、通称ラ王と呼ばれていた。ラ王はもっちりとした柔らかいものを好み、「好みの女性のタイプは？」と聞かれると「身も心も柔らかい女性」と答え、「好みのカップラーメンのタイプは？」と聞かれると「小麦が香るもちもちした麺がよい」と答えたほどである。

それゆえ、イ国が侵攻してきたときに、オテヤワラカニが「どうか戦争するにあたってはお手柔らかに」と申し出たのも無理からぬことであった。ところがイ国は、オテヤワラカニの言葉などお構いなしにがんがん攻め入ったから、ラ国はすぐに戦争に負けてしまったのであった。

ラ国の記録係であったツマビラカニが後に詳らかにしたところによると、ラ族の蟹たちはおとなしい性格ゆえにそもそも戦闘意欲がほとんどなかったらしく、イ国がラ国に攻め入ったまさにそのときも、ラ族の蟹はぜんぜん緊張感のない状態ですごしていたという。タカラカニは高らかに笑い、ホガラカニは朗らかに笑い、ナメラカニはボデイクリームを塗って甲羅を滑らかにしており、オオラカニは気持ちをおおらかにしてイの国を受け入れ、キヨラカニは瞑想して心を清らかにし、オテヤワラカニの後であるヤワラカニは柔軟体操をして身体を柔らかにし、ウララカニは海

底に差し込む麗らかに輝くお日様の光を浴びてリラックスし、ナドラカニはなだらかに流れる海流に身を任せてたたくっており、ヤスラカニは安らかに眠り、お洒落好きのキララカニはきららかに着飾ることに夢中で、唯一戦う意思があったのはカチカチと荒らかに鉄を打ち鳴らしていたアララカニだけであったから、こんな状態ではアキラカニが指摘するまでもなく明らかに、戦争に負けることは確実だったのである。

ラ国を支配下に置き、以前に比べ俄然大きく強くなったイ国は、いよいよヤ国に戦争を仕掛けた。

ヤ国は大きな国なので、これを支配下に置けば、イ国は蟹社会を征服したも同然となる。しかし、ヤ国に住む蟹は数が多いので、ラ国を併合するときほど楽な戦争とはならなかった。

最初はイ国が優勢であった。ところが、ヤ国がヤ族以外の蟹、すなわちユタカニ、オオマカニ、ホノカニ、ハルカニ、バカニ、ニワカニ、ノドカニ、ホカホカニ、ヤブサカニ、ユウガニ、カスカニ、スカスカニ、ワズカニ、シズカニを仲間に加えたことでイ国とヤ国はほぼ互角となり、戦争は長期化した。イ国も負けじと、オゴソカニ、オロソカニ、ヒソカニからなるソ族を仲間に入れて応戦したが、戦況にさしたる変化はなかった。

ただし、戦争は蟹たちに利益を齎^{もたら}しはしても、弊害を齎しはしなかった。というのも、戦争によって戦争特需が発

生したからである。しかも戦争をすると、「風が吹けば桶屋が儲かる」式に、蟹の餌が豊富になるのである。蟹どうしの激しい争いによって海底の砂が巻き上げられると、砂に含まれていた豊富な栄養が表に出てきて植物プランクトンが増え、それを餌として動物プランクトンが増え、動物プランクトンを餌として魚や貝がよく育ち、結果として蟹の食料が増えるというわけである。

そういうわけで、ヤ国の存亡を揺るがすこととなる直接の原因は、戦争そのものではなかったのである。ヤ国を滅亡にまで追い込んだのは、戦争に乗じて現れた第三勢力にほかならなかった。

その第三勢力は、意外なことに、海外、海外からやってきた（海外といっても、外国のことではない。海に住まう者たちにとつて、海外とは文字通り「海の外」のことであり、つまりは陸や空のことを意味する）。

ヤ国を滅ぼしたのは、蟹を水揚げすることを天空から虎視眈々と狙う鳥の一族であった。この一族は貴族の血を引いているので、鳥貴族と呼ばれることが多い。

鳥貴族はトットリという地域に住んでおり、ふだんはラツキヨウや二十世紀梨を食べて暮らしているのだが、無性にシーフードが食べたくなることがあり、しばしば魚や蟹を求めて海に繰り出していったのだ。

鳥貴族をまとめるリーダーは、いつも天下を取ることばかり考えているテンカトリという名の鳥である。テンカト

リの的確な指導によって、鳥貴族の連中は、まずイ国を壊滅させることに成功した。

実はイ国には、第三勢力から送り込まれたスパイが密かに紛れ込んでいた。ヒソカニこそ、鳥貴族からのスパイだったのである。ヒソカニの正体はハットリという名の鳥であった。

ハットリは「忍者ハットリくん」として名を轟かせるほどの凄腕の忍者である。それゆえ、ハットリは鳥でありながら水遁の術によって水中に長く潜っていることができるのである。

ハットリの暗躍が効果を発揮し、イ国にいた蟹のほとんどはあれよあれよというまに鳥に捕獲され、水揚げされた。水揚げされた蟹は、舵取りが得意なカジトリという鳥が船長を務める船に積まれていった。

こうして、イ国に残されたのは上層部の蟹だけとなった。イ国の王であるイカニは頭を抱えた。「いかにしてこの危機を脱すればよいだろう」

「われわれだけで何とかするしかなかろう」シハイカニは言った。「幸い、忍者ハットリを捕虜にすることに成功した。ハットリをうまく使えば、逆転もありうる」

「いや、駄目だ。そいつは捕まえたときはハットリかと思っただが、よく見てみるとオトリという名の罠おとりだったのだ。オトリでは役に立たない」

「何と言うことだ。貴様、ただのオトリだったのか。騙し

たな」シハイカニは激高し、オトリの首を鉄でちよん切った。「捕虜が役立たずだったのは残念だ。しかし、幸いなことに、上層部の蟹はいずれも水揚げされずに済んでいる。上層部の蟹の力を結集すれば、まだ、何とかなるはずだ」「いや、それがそうでもないのだ」イカニは弱りきった顔で言った。「見てみる。ここには私とコワイカニとシハイカニしかない」

「馬鹿な」シハイカニは周囲を見渡した。「他の蟹はなぜここにいない。外国産の蟹たちはどうした。そうだ、ジャマイカニやドミニカニのことだ。あいつらはどこへ行ったのだ」

「此は如何に！」コワイカニがここぞとばかりに叫んだ。「奴らはなぜここにいないのだ」

「実は、ジャマイカニはジャマイカに、ドミニカニはドミニカに帰国してしまったようなのだ」

「なんとということだ。わざわざ外国から取り寄せて仲間に加えたというのに。仕方ない。こうなれば地方産の蟹に頼るほかあるまい。シズオカニ、フクオカニ、オオサカニ、モリオカニ。お前たちの力を貸してくれ。それから、どこかしらで仲間にしたドコカニとドツカニ、お前たちの力もだ」

「駄目だ。奴らもそれぞれ故郷に帰ってしまった。シズオカニは静岡に、フクオカニは福岡に、オオサカニは大阪に、モリオカニは盛岡に帰郷したらしい。挙句の果てには、ド

コカニはどこかに、ドツカニはどっかに行ってしまう始末だ」

「くそつ。奴らめ、肝心なときに逃げ出しおつて」シハイカニは顔を真っ赤にして激怒した。

「これこれ。あんまり怒りすぎるのは身体によくないぞ、シハイカニよ」と言つてイカニは窘めた。「顔を真っ赤にしていると、茹で上がつてしまつて、シハイカニからマツカニになつてしまふ」

だが、いかにイカニといえども、三匹だけでヤ国や鳥と戦うことははやできないと判断せざるを得なかった。それゆえイカニは、ヤ国に降伏したうえで、鳥と戦つてイ族を助けてくれるようヤ国に頼むことにした。屈辱的な選択ではあったが、選択肢はほかにない。

「ヤ国の王、ミヤビヤカニよ。われわれに力を貸してほしい。ともに、鳥と戦おうではないか。そうして、捕虜にした鳥を焼き鳥にして食べてしまおう。そうでもしないと、たくさん蟹を水揚げされてしまったわれわれ遺族の気持ちには救われぬ」

「イ族」と「遺族」の掛詞かけことばを雅やかに感じたミヤビヤカニは、イカニの願いをすんなり聞き入れた。「よろしい。われわれヤ族も、鳥貴族の連中には長年悩まされてきた。いまこそ力を合わせ、鳥たちに一矢報いるときだ。それに、鳥貴族の焼き鳥は手頃で美味しいと聞く。食べるのが楽しいではないか」

こうしてイ国とヤ国は一時休戦し、鳥貴族を打ち倒すべく同盟を結んだ。民族の垣根を超え、蟹たちの心は一つになった。

ところが、である。そんな蟹を嘲笑うかのように、鳥貴族はすでに次なる作戦を実行に移していたのである。

ちょうど、イ族とヤ族の蟹が、ヤ国の中央広場に集まって作戦会議を始めた頃だった。議長として会議を取り仕切っていたミヤビヤカニは、唐突に後ろから背中をつつかれて、びっくりして飛び上がった。「わっ」

「父さん。僕だよ。スコヤカニだよ」

そこにいたのは、ミヤビヤカニの二匹の息子、スコヤカニとノビヤカニであった。ミヤビヤカニは胸を撫で下ろした。「なんだ、お前たちか。一体、何の用だね。いま、お父さんたちは大事な会議をしているところだ。すまないが、後にしてくれないか」

スコヤカニは鉄を横に振った。「父さん。違うんだ。僕たちは、大事な話があつて来た。作戦会議なんかよりも、ずっと大事な話なんだ」

「どうしても、いまでなければ駄目なのか」

「そうなんだよ。とつても大事な話さ」ノビヤカニも言った。「この話を聞いたなら、作戦会議なんかしてる場合じゃないってことに気づくはずだよ」

「どういう意味だ。まさか、キラビヤカニの身に何かあったのか」身体の弱いキラビヤカニが重篤な病に倒れたので

はないかと、一瞬ミヤビヤカニは身構えた。

「違うよ」即座にスコヤカニが否定した。「もつと重要なとき。父さんも本当は気づいているんだらう？」

「何のことだ」

ミヤビヤカニが問うと、スコヤカニはくすくす笑い始めた。

「父さん、もしかして本当に何も気づいていないのかい。まったく驚いたね」

「所詮、蟹っていうやつはこの程度の知能しか持っていないってわけさ」ノビヤカニは嘲笑して言った。「だって脳

には蟹味噌しか詰まっていられないんだもの」

「何だその口の利きかたは。お前たち、どうかしてしまっ

たのか」

「まだ気づかないのかい、僕たちの正体に」

「ならばご覧いただこう。これが僕たちの正体だ」

スコヤカニとノビヤカニが、自らの殻をぱりぱりと剥がし始めたのと同時に、地響きがして辺りが砂煙に覆われた。

「どうしたとだ」何やら身体に違和感を覚えたコワイカニが、藻掻くように身体を動かすと、頑丈な紐のようなものが纏わりつくではないか。慌てて周囲の蟹の様子を見ると、どの蟹にも同じように紐のようなものが絡みついている。コワイカニは叫んだ。「此は如何に！」

「何ということだ！」事態を把握したミヤビヤカニが叫び返した。「これは蟹漁をするための網だ！」

ミヤビヤカニは網から逃れようと必死で藻掻きながら、息子たちを目で探した。しかしスコヤカニの姿もノビヤカニの姿もすでになく、ただ蟹の殻のようなものが散らばっているのが見えるだけだった。

ミヤビヤカニは、はたと気づいた。

スコヤカニとノビヤカニに見えたあの二匹は、実は蟹の殻に入っていたスパイだったのである。

実は、鳥貴族が戦争時の混乱に乗じてスパイを潜り込ませていたのは、イ国に対してだけではなかった。ヤ国にも、鳥貴族から派遣された侵入者がいたのだ。水びたしでも生きていける体質を持つシットリとジットリという兄弟の鳥である。

シットリとジットリは、ヤ国にこっそり忍び込むと、それぞれスコヤカニとノビヤカニに化けて、まんまと国の中枢へ潜入することに成功していたのである。そしてシットリとジットリは隙を見計らって、あやとりを得意とするアヤトリの作った網を、ヤ国じゅうに張り巡らせていた。この網を使うことで、いま、鳥貴族は蟹を一斉に引き上げることに成功したというわけだった。

ミヤビヤカニがさらによく辺りを見てみると、ジカニ、マジカニ、ミジカニ、テミジカニの四匹からなるジ族の蟹が、イ国ともヤ国とも関係なく野次馬として戦争を見に来ていたせいで、網に巻き込まれているのが見えた。

「戦争を直に観察したいと思ってここに来たら、とんだ災

難に巻き込まれてしまった」とジカニは嘆き、「戦争を間近に見てみたいなんて思わなければよかった」とマジカニは後悔し、「戦争を身近に感じたいなんて馬鹿なことを考えた」とミジカニは頭を抱えたが、いまさら何を言っても遅かった。缺で網を切ろうとしても、頑丈に作られていて切ることができない。なすすべもなく、蟹たちはぐんぐん上昇していった。ちなみに、この一生を手短に終わらせたかと考えていたテミジカニだけは、「災難に巻き込まれてしまった」と喜んでいたという。

かくして、イ国とヤ国の蟹は、一匹残らず網で水揚げされてしまった。

水揚げされた蟹は、やはりカジトリが舵取りしている船に積み込まれ、トットリの地へ運び込まれた。

これまでになく蟹の漁獲量が多かったので、トットリの地はお祭り騒ぎとなった。ウツトリ、アゲアシトリ、イノチトリ、ウケトリ、オツトリ、カイトリ、カキトリ、カリトリ、カルタトリ、キキトリ、キゲントリ、キリトリ、クミトリ、ケミストリ、ゴトリ、サトリ、シモトリ、シャツキントリ、シリトリ、ダレヒトリ、チリトリ、テトリアシトリ、テントリ、トシトリ、ニンキトリ、ヌキトリ、ネズミトリ、ネットリ、ノツトリ、ハエトリ、ヒキトリ、ヒトリヒトリ、ベツトリ、ポツトリ、ホトリ、ポトリ、ミオトリ、ミトリ、ムコトリ、ムシトリ、メントリ、モノトリ、ヤケブトリ、ヤリトリ、ヤワラトリ、ユトリ、ユミトリ、ヨ

クブトリ、ヨメトリは、めいめい大漁を祝って踊り始めた。踊りに合わせて作曲家アラン・シルヴェストリがファンファーレを演奏し始めると、ますます鳥たちは大盛り上がりである。いつもは気難しく額に皺を寄せている哲学者のラ・メトリも、このときばかりは頬を緩め、上機嫌になっていた。トットリの地を治めるテンカトリ、その跡取りであるアトトリも、満足そうな表情を浮かべている。

しかし何と言っても一番喜んでいたのは巨漢の鳥たち、すなわちスモウトリ、セキトリ、コブトリ、サケブトリ、ミズブトリ、ヨコブトリである。彼らは、まだ生きている蟹を目にしただけで、文字通りよく肥えた舌からじゅるりと唾液を滴らせ始めた。

すべての蟹はいったん一箇所に集められた。冷蔵庫のような場所らしく、非常に冷えるが、凍えきってしまうほどではない。

この冷蔵庫のような場所にはすでに蟹が何匹かいて、そのなかには本物のスコヤカニとノビヤカニもいた。寒さで震える二匹を抱き寄せ、ミヤビヤカニは息子たちと再会できたことをひとまず喜んだ。

先にイ族とラ族が調理されることになったらしく、次々にイ族とラ族の蟹が調理台へと連行され始めた。ミヤビヤカニはそれを呆然と眺めることしかできなかった。

他のヤ族の蟹は、イ族とラ族が調理台へと連れて行かれるのを見て、恐怖していた。いつも和やかにしていると評

判のナゴヤカニでさえ、故郷の名古屋のことを思いながら恐怖に震えていた。いつも気分が華やかなはずのハナヤカニは華やかな気分になれず、ニコヤカニはこやかではなく、オダヤカニは穏やかでなく、アザヤカニはちつとも鮮やかでなかった。ニギヤカニは、普段賑やかにしているのが嘘のように、黙りこくっていた。唯一、シメヤカニだけが、いつもの通り、しめやかにしていた。

調理台へと連行される直前、シハイカニは、ミヤビヤカニにこう言った。「すまなかつた。私が支配欲を剥き出しにしたばかりに、こんなことになってしまった。ヤ国に戦争を仕掛けたばかりに、イ族のみならずヤ族までも、一匹残らず鳥に捕らえられることになってしまった。本当にすまない。恨みたいなら、大いに恨むがいい。それだけのことをイ族はやつたのだ」

しかし、非常時においてもミヤビヤカニはあくまで雅やかであった。「ヤ族は、イ族を恨んだりはいしない。謝っている暇があるならば、ここから全員が生きて海に帰るにはどうすればよいかに頭を使うのだ」

「いや、もう全員は無理だ。イ族の者はすでに何匹か鍋に放り込まれてしまったらしい。だから、ヤ族だけでも生き延びるのだ。鳥が、われわれイ族を食べている隙を狙って、逃げ延びるのだ」

これがシハイカニの最後の言葉であった。ミヤビヤカニが「ああ、約束だ」と返答した次の瞬間、シハイカニはぐ

つぐつ煮立った鍋に放り込まれ、絶命した。

イ族とラ族はすべて蟹鍋にされてしまい、瞬く間に鳥のお腹に収まっていく。

この様子を見たミヤビヤカニは、打ち震えた。蟹が次々に加熱され、解体され、鳥の胃に収まっていく様子は、それはそれは恐ろしいものであった。

ミヤビヤカニは逃げなければと思った。シハイカニとも約束したではないか。鳥に食べられてはならない。絶対に食べられてなるものか。

だが、ヤ族の蟹は頑丈な檻の中に閉じ込められており、しかも檻の外には鳥の目が光っていた。まさにヤ族は籠の中の鳥、否、籠の中の蟹であった。ミヤビヤカニは絶望した。ヤ族の全員が絶望していた。もはや逃亡は不可能であった。

しかしヤ族は、絶望すると同時に、一つの強固な信念が己の心に湧き上がるのを感じていた。あんなふうには鳥に食べられてたまるものか。われわれはつねに雅やかでなければならぬ。ヤ国は勃興してからずっと、雅やかに、かつきらびやかにを国のスローガンとして掲げてきた。ならば、滅亡するときも、雅やかかつきらびやかでなければならぬ。鳥に啄まれて滅亡しては、ヤ族の名が廃る。ヤ族であるからには、美しく散らねばならない。

ヤ族の蟹たちは決心した。鳥に食べられてしまう前に、蟹どうしで共食いしてしまおう。そうすれば少なくとも、

鳥に食べられることはなくなるはずだ。これが、われわれにできる最後の抵抗だ。

そこでまず、スコヤカニがホソヤカニを食べた。そのシメヤカニがスコヤカニを食べた。そしてタオヤカニがシメヤカニを、ユルヤカニがタオヤカニを、アデヤカニがユルヤカニを、ハナヤカニがアデヤカニを、ツヤヤカニがハナヤカニを、コマヤカニがツヤヤカニを、コトコマヤカニがコマヤカニを、サワヤカニがコトコマヤカニを、ナゴヤカニがサワヤカニを、ニコヤカニがナゴヤカニを、ハレヤカニがニコヤカニを、マロヤカニがハレヤカニを、シナヤカニがマロヤカニを、オダヤカニがシナヤカニを、ノビヤカニがオダヤカニを、カロヤカニがノビヤカニを、ササヤカニがカロヤカニを、スマヤカニがササヤカニを、ナヨヤカニがスマヤカニを、ニギヤカニがナヨヤカニを、ヒヤヤカニがニギヤカニを、ツツマシヤカニがヒヤヤカニを、シトヤカニがツツマシヤカニを、オシトヤカニがシトヤカニを、アザヤカニがオシトヤカニを、キラビヤカニがアザヤカニを、順番に食べていった。そして最後に、ミヤビヤカニがキラビヤカニを食べた。

ヤ族の蟹は、ミヤビヤカニの胃のなかに収まり、消化されていった。あの食いしん坊の鳥たちも、いくら何でも胃液でどろどろになった蟹の身までは食べようと思わないであろう。これで、ヤ族のほとんどは、鳥に食べられずに済む。

「見たか。われわれは、最後の最後に鳥に一矢報いたのだ。われわれの勝ちだ。やったぞ。やったぞ。やったぞ……」

そう言って、ミヤビヤカニは快哉を叫んだつもりだった。しかしミヤビヤカニは、実際には一言も声を発することができなかった。ミヤビヤカニにできたことは、ただひたすら泣くこと、泣きながらヤ族の蟹の冥福を祈ること、そして、最後に残った自分が鳥に食べられる瞬間を待つことだけであった。

そんなヤ族の取った行動の一部始終を見ていた蟹がいた。オゴソカニである。オゴソカニを始めとするソ族は、ヤ族と同様、まだ調理されずに生きていたのである。

ミヤビヤカニがあまりに不憫であったので、オゴソカニは、何か声をかけてやろうと思った。しかし、何と声をかけていいものか、オゴソカニには分からなかった。

けっきょく、オゴソカニは、厳かにこう言うことしかできなかつた。

「これがほんとのカニバリズム」



「以上が、ヤ国が滅亡した経緯のすべてだ」マコトシヤカニは一呼吸置くと、タシカニ、サスガニ、フクヨカニを順々に見つめてから尋ねた。「どうだね。これで信じる気になつただろう」

「信じるよ」フクヨカニは大きく頷いた。「とても引き込まれる話だった」

「僕はまだ信じがたいね」サスガニはさすがに疑り深い。「そもそも、この話には大きな矛盾があるじゃないか」

「矛盾？ どういうことだい」

「ヤ族はすべて鳥貴族によって水揚げされてしまったんだろう？ それなのに、なぜヤ族である君がまだ生き残っているんだい」

「確かに」

「それは、マコトシヤカニさんだけは運よく網に引つかからなかつたんだろう。だから、水揚げされることなく、ヤ族で唯一生き残ることができた」

「いや、それはありえないよ。マコトシヤカニは、ヤ族が水揚げされた後の出来事も話してくれただろう。ということとは、マコトシヤカニも他のヤ族と一緒に水揚げされたと考えないとおかしい」

「確かに」

「でも、水揚げされたんだとしたら、マコトシヤカニさんは蟹鍋にされて鳥に食べられてしまったはずじゃないか。マコトシヤカニさんが生きているというこの事実は、どう説明がつくんだ」

「確かに」

「それは、こういうとき。マコトシヤカニはありもしない話をでっち上げて、まことしやかに語って聞かせたの

さ」

「マコトシヤカニさんが嘘をついてたというのかい」

「そう考えないと、説明がつかないじゃないか。そうなんだろう、マコトシヤカニ。いや、マコトシヤカニという名前も、存外、出任せなのかもしれないね」

「バレてしまつたら、しかたない」マコトシヤカニと名乗っていた蟹は、ほう、と溜息をついた。「君の言う通り、マコトシヤカニという名前は出任せだ」

「ほら見ろ」サスガニが勝ち誇つたように言った。「やっぱり嘘だった」

「だが誤解しないでほしい」マコトシヤカニと名乗っていた蟹は、慌てて言った。「ヤ国が滅びたというのは本当だ。イ国とヤ国が戦争をしたことも、鳥が攻め入ってきたことも、ヤ族がお互いを食べたことも、すべて本当の話なのだ。実は、君たちに一つだけ話していないことがあった。あの後、ミヤビヤカニは鳥に食べられず、生きて海に帰つてくれたのだよ。共食いを始めた蟹を見て気味悪く思った鳥たちは、ミヤビヤカニを食べる気になれなくて、海に放り捨てたのだ。それで、ミヤビヤカニだけは生き延びることができた」

「ということ、君の本当の名前って」

「そうなのだ。私の名前はミヤビヤカニ。いままで騙してきてすまなかつた。だが、マコトシヤカニと名乗つたのは、ちゃんと理由があるのだよ。私はもう、ミヤビヤカニ

という名を口にできる資格はないと思つている。自分が守るべき国を、守れなかつたのだ。私はすべてを失つた。仲間を失い、住む場所を失い、地位も名誉も失つた。そんな蟹、もう雅やかでも何でもないからね」



「君たちも、くれぐれも鳥には気をつけたまえよ」ミヤビヤカニは言い、その場を立ち去つた。横歩きで遠のく横姿は、何だかとても寂しそうに見えた。

タシカニ、サスガニ、フクヨカニは、しばらく黙り込んで立ち尽くしていた。

「ミヤビヤカニさん、可哀想だったね」

「確かに」

「蟹の一生って、どうしてこうも理不尽なんだろうね」フクヨカニが不意に言った。「蟹だって一生懸命に生きている。それなのに、みんな蟹を襲つて食べようとするじゃないか。酷い話さ」

「しかたがないよ」サスガニが諦めたような口調で言った。「この言葉の世界にあって、食物連鎖のピラミッドは不変だからね。どうあつても、その上下関係は変わらない。言葉の世界が、今後どうなつたとしても、これだけは絶対に変わらない」

「言いたいことは分かるよ。でも、どうして、そうも強く

言い切れるんだ」

「考えてもみろよ。蟹類はどれも副詞でしかない。所詮は形容詞や動詞の飾りにすぎないんだ。それに対して、鳥類はどうだ。ほとんどが名詞だ。主語の位置を占めることは容易だし、それでなくても目的語の位置を占めることができる。副詞である蟹が、主役の座を奪うことなんて、逆立ちしたって無理なのさ」

「蟹類は、どうあがいても食べられる運命ってことか」

「その通りさ。悲しいけれども。この言葉の世界ってやつは、もともと理不尽な構造をしているのさ」

三匹の蟹はすっかりしよげ返ったようになり、溜息をついた。

そのときだった。

いかにも凶悪そうな鯨が、三匹の蟹の前に姿を現したのだ。鯨は、蟹をじろりと睨みつけた。

ああ。やはり蟹は捕食者に食われる運命だったのだ。タシカニ、サスガニ、フクヨカニは目を瞑り、覚悟を決めた。

しかし、いつまで経っても鯨は齧りついてこない。恐る恐る目を開けると、鯨は、予想外の行動を取ってきた。

鯨は、にいつと陽気な笑顔を浮かべて、こう言ったのである。「どうしたどうした。三匹ともシケた面をして。何があったのかは知らないが、生きてりゃまたいいことあるさ。元氣出せよ、兄弟！」

鯨は、鰭ひれを使って三匹の蟹の肩を叩き、励ましてくれた。

「ありがとうございます、鯨さん」

「いいってことよ」

鯨は、じゃあな、と言ってものすごい速さで泳ぎ去ってしまった。

「いまの、何だったんだろう。不思議な鯨だったな。どうして僕たちを食べなかったんだろう。どうして知り合ひでもない僕たちを、あんなにも励ましてくれたんだろう」

蟹たちは、間の抜けたように、蟹股で立ちすくんでいた。いつまでも立ちすくんでいるかに見えた。静寂のなか、いつまでも時が止まっているかのようにであった。

そのとき、あつ、とサスガニが大きな声を上げたのである。

「分かったぞ。あの鯨は、ナグサメという鯨だ。しょんぼりしている者を見かけると、慰めずにはいられない鯨だ」

「そうだったのか。どうりで」

「言葉の世界ってやつも、まだまだ捨てたものじゃない。そんな気がしてきたよ」しみじみと、サスガニが言った。

「確かに」

フクヨカニが、タシカニの真似をして頷いた。それがあんなり似ていたので、三匹とも、思わず吹き出してしまった。三匹は、大いに笑った。

「ところで」ひとしきり笑った後、フクヨカニが言った。

「ミヤビヤカニは共食いをしたと言っていたけど、本当に蟹を食べたらどんな味がするんだろうね。噂では、蟹味噌

の部分とはとくに美味らしいよ」

「おいおい、フクヨカニ」サスガニが、ぎよっとして言った。「さすがに、僕たちを食べようなんて思っていないよね」

「あはははは」フクヨカニは、大きな身体を揺らして笑った。「本当に共食いしたいなんて思うはずないじゃないか。君たちなんか、食べても美味しくなさそうだしね。それより、僕、本当にお腹がぺこぺこだよ。三匹で、どこか美味しいもの食べに行こうよ」

「それがいい」
「確かに」

三匹の蟹は、再び歩き出した。ここまで数日間、ヤ国を目指して歩き続けてきた彼らは、もう歩き疲れてへとへとになっていたはずだった。しかし、いまや彼らは、以前にも増して力強く歩き始めていた。